

【慶大が講座開設】医療DXを体系的に学習-製薬などの活用事例紹介

08面



各グループ内での議論の様子

慶應義塾大学は今年度から、医療DX（デジタルトランスフォーメーション）を体系的に学習できる寄附講座を、薬学部の6年制薬学科と4年制薬科学科の2年生を対象に開設した。製薬企業やIT企業等によるDXの活用事例紹介のほか、学生が社会課題を設定した上でデジタルによる解決策を模索するグループワークも実施している。薬学部でDXについて、単発ではない体系立てた講座の提供は全国的にも新しい取り組みとなる。

今年度の診療報酬改定で医療DX推進体制整備加算が新設されるなど、薬局や医療機関におけるDX化促進が急速に進む中、デジタルに関する基礎知識を持ち現場で対応できる人材の育成が課題となっている。

慶大では今年度から、DXへの理解促進や現場における実践事例の学習を目的に、6年制薬学科と4年制薬科学科の2年生を対象とした選択科目「デジタルヘルスと未来の医療」をシミックホールディングスとグループ企業のharmoによる寄附講座として開設した。

今年度は6月から約1カ月間にわたり、計8回の授業を実施。シミックとharmoのほか、NEC、中外製薬などIT、製薬、アカデミアの各分野から講師を招き、各視点からデジタルヘルスに関する授業が行われた。

薬学部医薬品情報学講座の堀里子教授は「医療現場で急速にDXが進む一方、大学ではDXに関する体系的な講座はなかった。harmoとパーソナルヘルスレコード（PHR）に関する共同研究を以前から行っていたため、趣旨に賛同してもらった上で寄附講座として立ち上げた」と経緯を語る。

初回授業では、シミックがオンライン服薬指導や電子処方箋など薬局に関連するDXの動き、PHRの仕組みや種類など、医療分野におけるDXの活用事例を説明。中外製薬は、創薬におけるリアルワールドデータ（RWD）の活用、生成AI（人工知能）に関する同社の取り組みなどを説明した。

社会課題の解決策議論、発表

7月の最終授業では、講座で得た知識を活用する学生参加型のグループワークも行われた。「医療分野におけるデジタルを軸としたサービスを多角的視点から考える」をテーマとし、参加学生を1グループ4~5人からなる20グループに分けた上で、デジタル技術を用いて医療分野や医薬品開発における課題解決方法についてディスカッションを行った。



ステージ上で全体発表が行われた

授業の前半では、学生一人ひとりが事前に設定した「デジタルを用いて解決したい課題」を各グループ内で参考にし、グループとして検討したいサービスを一つに絞った。解決したい課題の例として、「一人暮らしの高齢者を見守る仕組みの多様化」「AIによる新薬のターゲット特定を迅速にする」「いつでもどこでも薬剤師に相談できるアプリ開発」などが挙げられた。

後半は、4グループずつに分かれて検討したいサービスを発表し合い、代表となる1グループを講師が決め、計5グループが全体発表をステージ上で行った。

全体発表を行ったグループの一つは「健康診断を時短にする」をテーマとし、救いたい顧客像を「忙しくて健康を疎かにしがちな大人世代」として、具体的には仕事や育児が多忙で定期検診が受けられない人などに設定。

生活習慣の改善や定期検診を希望しているが、多忙により時間が取れないため、解決策としてヘルスケアアプリのデータを医療機関と共有して検査項目を減らして隙間時間を活用すること、日常的なデータから診断を行うことで異変を早期発見することなどを提示した。また、アプリによって毎日の運動を促すほか、足りない健康診断の項目の診断を行える近隣の医療機関の提案等も実施できるとした。

結果的に、子育て世代の健康促進によって社会全体の健康促進につながり、医療と国民の物理的・精神的距離を縮め、医療をより身近なものにできるとした。

講座を受講した薬学科の石川紫織さんは「マーケティングなど経済学部で学ぶ内容を医療分野に絡めて学習できたことに面白さを感じた。DXで医療をより良くしていこうと様々な分野の人が取り組んでいることを知ることができた」と感想を述べた。

堀氏は「現在の学生が卒業する5年後は薬局もDXが相当進んでいると予想するので、DXの経緯や中身を知り、どう活用すべきかを卒業前に学ぶ必要がある。各分野の講師が現場で何が起きているかをピックアップして語ってもらうことができた」と講座の意義を強調する。

今後の方向性に関しては、「AIや情報分野に対する苦手意識が薄れたなど、好意的な意見が学生から寄せられている。次年度以降も講座の継続を考えていきたい」と話している。